

楽曲解説

解説：林田直樹

(音楽ジャーナリスト・評論家)

本日のコンサートのテーマを一言で言うなら、「世界音楽としてのベートーヴェン」ではないだろうか？

指揮者のクリスティアン・バスケスは、新しい世代の「エル・システマ」を象徴する存在である。「エル・システマ」とは、ベネズエラが1970年代から国家的規模で取り組んできた青少年オーケストラによる音楽教育システム。南米でクラシック？と最初は誰もが耳を疑ったが、ベネズエラの子供たちが嬉々としてオーケストラに参加し、心の音楽としてクラシックを真剣に演奏し、犯罪に手を染めるのではなく正しい道に導かれていることが近年世界に知られるようになり、世界の音楽界に大きな波紋をもたらしただのである。

いまやベートーヴェンはドイツ・オーストリアだけの、ヨーロッパだけの専有物ではない。ベネズエラでも日本でも、この地球上のどこでも、真の心の音楽として、強く抱きしめ、我がものとして愛して構わない——世界音楽なのである。そんなメッセージが本日のプログラムからは伝わってくる。

ファン・パウティスタ・ブラサ

フーガ・クリオージャ

バスケスが本日の1曲目に選んだのは、「エル・システマ」以前のベネズエラを代表する作曲家の一人、ファン・パウティスタ・ブラサ(1898-1965)の「フーガ・クリオージャ」。

ブラサは首都カラカスに生まれ、ベネズエラ中央大学で法律と医学を学ぶが、やがて音楽の道を選び、ローマ留学から帰国後は、合唱指揮者および作曲家・教育者として活躍した。ベネズエラ国歌の公式編曲者でもある。

「フーガ・クリオージャ」(1931年)は、弦楽アンサンブルのために書かれた、作曲者お気に入りの小品。スペイン語の「クリオージャ」は、ポルトガル語で「クレオール」とも言うが、混血、漆黒の肌、植民地生まれ、新大陸、あるいは大地そのもの——といった幅広い意味がある。おろかで肯定的な響きのあるこの言葉には、他者を排除しない、受け入れる、多様に交わる、といったニュアンスが込められている。そこにフーガの永遠性を加えたこの楽しい作品は、「第9」の前に演奏されるのに実にふさわしい。

ベートーヴェン

交響曲第9番 ニ短調『合唱付』作品125

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が長年の構想を元にしながらも、1822年から24年にかけて(つまり50歳代の半ばに)集中的に取り組んで作曲した「交響曲第9番」は、こう言って差し支えなければ——異様としか言いようのない作品として、当時の聴衆の前に出現した。

まず、開始のあり方が、全く前例がなかった。通常の交響曲の作法なら、前置きとして、門構えに相当するような序奏があり、気分を落ち着けたところでやがて主部に入る。あるいは、単刀直入に本題に入ることもある。ところが「第9」の第1楽章は違う。曖昧模倣と

した霧の彼方から、かすかに何かが少しずつ見え隠れし、広がり、近づき、ついには巨大な力が全貌を現わす。そんな交響曲はそれまでに存在しなかった。この第1楽章が意味しているのは怒り、それとも怖れだろうか。そこで語られていることは、「第5」の第1楽章にも通じる、苦闘しながらも、何度も打ち砕かれ、一縷の希望さえも、最後には飲み込まれていくような、生きることのそのものの苦しみではなかろうか。

第2楽章の挑戦的な開始も前代未聞である。相手の襟首をギュッとつかむようなその気迫。瞬間の間合いというものを、これだけ体現した音楽があっただろうか。そもそも第2楽章は古典的な交響曲の手順を踏まえるなら、ゆったりとした歌謡的な楽章である。そこに虚を突くような攻撃的なスケルツォが来るのだ。旧来のメヌエットが貴族社会の時代の、お行儀のよい踊りの音楽であるならば、スケルツォは、市民社会の時代らしい、本音剥き出しの音楽である。歯に衣を着せないということである。

第3楽章は、音楽史上もっとも偉大な「休息」の音楽。静寂と穏やかさが人生のうちの最大の宝である——それはベートーヴェンがゆったりとした楽章でしばしば語ろうとしてきたことであった。ひとつの主題が変容を重ねていきながら、深い思索へと聴き手を導いていくこの音楽が意味するものは、わたしたちの日常が「平和」であり続けることの、かけがえのなさである。

第4楽章でベートーヴェンは、前代未聞の領域に突入した。不協和音に脅されるようなファンファーレの開始は、「歓喜の歌」の前提となるものが、矛盾や理不尽や苛立ちに満ちた世界であることを示唆している。続くコントラバスのレチタティーヴォ(アリアの前に置かれる、セリフとも歌ともつかぬ、音楽と言葉の混淆物)の何と奇妙なことだろう。これほど低弦が独立して、重く言葉にならない言葉を語り続けたことは、空前絶後である。

歌詞の原作者フリードリヒ・シラー(1759-1805)の「歓喜に寄す」は、当時さまざまな旋律をつけて集いの場で歌われる人気の大衆歌謡にもなっていた。それをベートーヴェンが全く新たな交響曲へと、壮大に昇華させたのが第4楽章後半である。1824年5月7日ウィーンでの初演でソプラノを担当したヘンリエッテ・ゾントークはまだ18歳。そんな少女の面影の残るソリストが参加していたことも興味深い。

歌詞のなかでぜひ気に留めておきたいのが、「星空の彼方」という言葉である。そこにおられるのは、必ずしもキリスト教の神とばかりは言えない。ベートーヴェンは耳疾ゆえに、一度は神を呪った男である。教会のミサを通してではなく、「田園」交響曲にあるような自然との一体感を通して、神というよりも創造主への感謝と信頼を取り戻していたことを、思い出しておきたい。

ナポレオン戦争の記憶も新しい1820年代、平和とはそもそも可能なか?という疑念が渦巻いていた混乱の時代に、ベートーヴェンは、過剰なまでに理想主義とも言えるこの交響曲を世に問うた。その灯明を見つめ続けることは、今なお大切である。

林田直樹／1963年生まれ。音楽之友社「音楽の友」「レコード芸術」編集部にて在籍したのち独立。新聞、雑誌、CDライナーノートやオペラ、バレエ、コンサートのプログラム等に寄稿。インターネットラジオ「OTTAWA」のプレゼンター、月刊「サライ」の「今月の3枚」連載などを担当。
